

行動に向けて

賛助会員 杉山百合子

家の中で「行動しない行動隊」と悪態をついていたら、聞きつけた事務局長様より「では提案を」との仰せをいただきました。

個人的に活動していらっしゃる方がいるのは存じております。行動隊の目的についても、原発に対する意見も様々と聞いています。行動隊に参加する意味は何でしょう。当初の「福島原発暴発阻止行動隊」に強く共感した方が多かったことと思います。私はそのときまだ規定年齢に達していない上に技術も体力もないという無い無い尽くして賛助会員になるのが精一杯でした。

隊の活動は「廃炉を国民事業に」「中心活動と周辺活動」など変化してきましたね。原発ウオッチャーの活動も貴重なことと思っています。

【自分 — 被災地に入ること】

皆様が試行錯誤して東電にアプローチされているのを横目に、個人で福島通いを始めました。現地社協のほか復興に関しては様々な団体が立ち上がり、自分が参加するに当たっては調べながら行き先を探しました。官製か民間か、中心は当事者か支援者か、原発に対してはどうか、など。

そのうち、そのようなことは違ふと思うようになりました。大事なことは、当事者の視線で継続して関わられるかどうか、その一点に尽きる気がしてきたからです。

行動隊の活動について現地の方に伝えたことがあります。帰ってきた反応は「色々な業者がいるからね」。被災地の復興予算や除染利権などを狙って官民間問わずたくさん入ってきているのが不安を呼んでいると感じました。

個人としても「やりたいこと」ではなく「何が必要か」常に心がけたいと思います。



(飯館村佐須、再生の会現地副理事長の菅野宗夫さんの田んぼでの田植え風景)

【報道 — 勘違い】

大きな違和感を持ったのは、南相馬の市長選報道でした。私はたまたま投票日前夜に市内にいました。そこで耳にした各陣営の主張は、復興一本でした。復興のためにいかに自陣営が役に立つか、それだけです。ところが結果を受けた全国報道は『脱原発市長が当選』。

現地記者は何を聞いてたの？

誰も原発の可否を主張していないし、今のあの町で原発推進を主張して勝てると思う候補がいるはずがない。争点にならなかったことを引っ張り出して何を言いたいんだ、と。見たいものしか見ない典型です。

現地で一番多くの方が大事に思っているのは、暮らしが元に戻るか、復興するか、です。原発に対する意見の違う人同士が協力して様々な活動をしている。

原発以外にもたくさん問題があるからです。

【行動隊 — 福島で集会をする意味】

2015 年、行動隊がいわきで集会を開きましたね。『原発事故収束・福島の復興 わたしたちは、何をすべきか、何ができるか』。これも違和感でした。

現地実績の少ない団体が御用聞きするのに「ここに集まって」は変じゃない？

現地の人がここに来るメリットは？なぜ、通って人の話に耳を傾けるということをしていないのだろう。

今年も集会を郡山でやるそうです。かつては「周辺活動」とされた復興支援にどれくらい深く関わられるのか、行動隊は試されていると思います。

【行動隊 — モニタリング活動】

技術も経験もある皆さんにとって最初から大きな活動の一つだったモニタリング。いくつかの自治体とは提携してモニタリングに協力し、ほかの自治体へも働きかけをされている様子。

かつては、川内村に惚れ込んで通われた方もありました。それあつての川内村とのご縁と思います。その方は、今は隊を離れていらっしゃるが。

【実例 — ふくしま再生の会】

外から入って活動し、信頼を得ている団体はたくさんあります。その中で、行動隊が 9 月末に向うふくしま再生の会についてお伝えします。

事故後の 6 月から毎週末、飯舘村に通い続けている団体です。現地の方と共同で、一人一人の要望に応じてそれぞれ専門の力を発揮されています。盆正月以外は、雪深い時期も休みません。住民の人が自宅や村内を自分で測って納得できる手助

け、屋敷林を除染するお手伝い、その木材を使った遮蔽効果実験、仮設住宅での健康医療相談やマッサージ提供、ハウスでの養液栽培の試行錯誤、試験田での米作り等々。

米袋の縛り方もわからない中から始めて継続している米作り。現地で受け入れて下さる方のおかげですが、基準を超えなくても廃棄させられた時期を経て、自分たちでの消費が認められるようになりまし。現地理事の方は、流入する水に汚染されないよう、自分のいるときしか田に水を入れたいそうです。放射線だけでなく、鼠に倉庫を、猪に田を荒らされながら、ダストも計測しながら。

【これから — 何が求められているか】

それでも責める人はいる。

ある集会に再生の会の理事と参加している住民の方が呼ばれたとき、会場の住民の方から非難を浴びました。再生の会の活動が丁寧なことを認めた上で、

「家の年寄りがああ広い村に帰ると言っている。帰る手伝いをしている再生の会は、年寄りをそそのかすように見える」と。

閉会後の懇親会で非難した人とされた人が穏やかに会話されているのを見てほっとしたけれど、どちらの立場も辛いのだと感じました。

万人に認められる活動はないのでしょうか。それでも入っていくのなら、何のために、誰のためにと、振り返りつつ歩きたい。行動隊にもそれをお願いします。

分かっていた「冠水工法」の無理

行動隊員 中島賢一郎

この 7 月に 3 号機での水中ロボットによる格納容器内部調査で、初めて核燃料デブリらしき物質が画像にとらえられました。イチエフの 1~3 号機にある核燃料デブリの総量は 800 トンと見積もられています。

一方、9 月 1 日に公表されたイチエフの廃炉の工

程表である「東京電力(株)福島第一原子力発電所 1~4 号機の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ」第 4 版(案)では、冠水工法を棚上げし、気中工法—横アクセスの技術開発を先行させることが示されています。

また、核燃料デブリの取り出しに向けた今後の進

め方については、「ステップ・バイ・ステップのアプローチで進める」と段階的な進め方を探ることとされています。

さらに、核燃料デブリ取り出しの開始時期については、「ロードマップ」第三版の「2021 年内に初号機における燃料デブリ取り出しを開始する」という表現を「2021 年内に初号機における燃料デブリ取り出しを開始することを旨とする」と改めています。

国際廃炉研究・開発機構(以下「開発機構」と略)はイチエフの廃炉に関する研究開発を目的として2013年8月に設立され、政府、東京電力、原子力損害賠償・廃炉等支援機構(以下「支援機構」と略)と一体になってイチエフの廃炉について取り組むとされています(右図参照)。

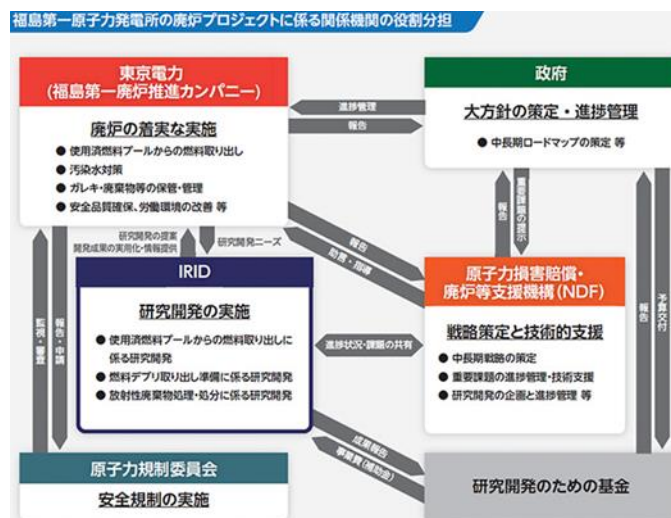
この「開発機構」が2016年3月に発表した「原子炉格納容器漏えい箇所補修・止水技術の開発完了報告」を読むと、「開発機構」は2016年2月時点ですでに、「支援機構」が冠水工法による核燃料デブリ取り出しの重要な技術的要件として挙げている、取り出し時の格納容器水位レベルの確保、作業員の被ばくの抑制、閉じ込め機能の確保のいずれについても近々の実現性について見通しは得られないと判断していたことが分かります。

このように、格納容器内部調査を中心に核燃料デブリの取り出し準備が進展する一方、その進展によって認識された現実に即して、燃料デブリの取り出しそのものへの動きは減速しています。

他方、被災者の避難・帰還、復興に係る施策は、そのことを一切反映しておらず、早期の帰還・復興へと加速するばかりです。自分はそのズレないしずれ違いが気になります。

核燃料デブリを取り出さなければ、原子炉建屋や格納容器が経年劣化により損傷し高レベルの放射性物質が外部環境にじかに曝されるリスクの増大を避けることはできません。

また取り出すとすれば、その作業に伴うイベントリスクも、どれほどであるかは別として、必ず増大します。



未経験の事態に係るリスクの評価がきわめて難しいということは分かります。

しかし、帰還や復興を進めるサイドが、たとえ不確実で幅が広くても、それぞれの場合の評価を明らかにしないまま帰還・復興の一方向だけに加速していくことは、帰還し復興を目指す人々に対してもあまりにも無責任ではないでしょうか

緊急招集訓練(第1回)のお知らせ

- 1、目的および概要：福島原発行動隊の設立の本旨を全うするために、福島第一原発事故の収束作業において、若い世代の被ばくを避けたい、高レベルの被ばくが予想される作業が緊急に必要な場合に備えて、招集訓練を行います
- 2、実施月日：2017年10月14日(土)
- 3、招集場所：福島県内某所
- 4、招集の通知：10月12日(木)および13日(金)、電子メールにより、事務局から会員に、詳細な招集場所および時間をお知らせします。

フォーラム 10・14 オプショナルツアーにご参加を

見て、聞いて、知って、考える「福島復興」

「ふくしま農家の夢ワイン」の紹介

福島県二本松市東和地区は、阿武隈山系の恩恵を受ける自然豊かな土地です。

この里山の原風景の中に、ふくしま農家の夢ワインはあります。

山には山葡萄が群生し、桑畑が広がる山間の場所でした。

かつての稚蚕所は、地元のわたしたち、農家のオヤジの手によってワイナリーに形を変え、人々が集う場所に生まれ変わりました。

これからも、自分たちが楽しめる場所が、ワイナリーを訪れる人々がほっと気持ちが安らぐような場所、そして、夢を語り合う場所となっていくことを目指します。

まだまだ木が若いため、1年1年の成長がワインの味にも影響していきます。その年の天候や病害虫の発生などにも悩まされながらも、その年の味の違いを楽しんでいただけるようお客様との会話を大事にしなが飲んでいただいています。

今現在、ヤマソービニヨンのワインが主流となっており、栽培地区ごとに商品化しております。ヤマソービニオンは山葡萄とカベルネ・ソーヴィニヨンの交配種となっており、山葡萄の色味とカベルネの香りがやさしく渋み、苦味、酸味とが調和し、飲みやすく仕上げてあります。和食にもデザートにも合うワインです。

【オプションツアー実施要領】

日時 : 10月15日(日)10:00 スタート

宿泊(10月14日(土)): 「ふくしま農家の夢ワイン株式会社」を立ち上げた方々の農家民宿

参加費: 6,000円(一泊二食付・税別)

申込・問合せ: 杉山(携帯 090-5341-1169/メール nora@cityfyjisawa.ne.jp・ファクス 0466-47-2130)

※申込締切は10月3日(火)



【10月予定】

- 緊急招集訓練: 14日(土)
- 郡山集会: 14日(土) 13:00
- 連絡会議: 6日(金)、13日(金)、20日(金)、26日(木曜、院内集会後)、28日(土)
- 院内集会: 26日(木) 11-13時